

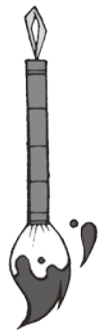
続 七夕あれこれ

七夕については、2016年7月号で「七夕、あれこれ」として、一度触れましたが、今回はその続編です。

その回でも触れましたが、七夕の起源とも言われる、わし座の牽牛星と、こと座の織女星が7月7日の夜に出会うという伝説は、2000年も前に中国で記された『荊楚歲時記』という書物に記されています。この内容については、皆さんもよくご存知のことだと思われませんが、このように、星にまつわる伝説が、日本では節供の行事の一つとして定着します。人日は七草の節供、上巳は桃の節供、端午は菖蒲の節供、重陽は菊の節供など、それぞれの季節の植物と深く関わっています。平安時代には「撫子合わせ」という花を用いた行事が行われていたらしく、室町時代には七夕の行事として「花合わせ」が行われ、これが「七夕立花」と呼ばれ、この習慣が後に生け花の葬祥になったとも言われています。また、ある説には、七夕は盆行事の一環としての意味合いもあると記されています。盆行事に合わせて、先祖の霊を祀る前夜祭として、7月7日に人家から離れた機屋で乙女が神を祀り、七夕送りを行なって穢れを神に託して祓ってもらう、「物忌」の行事という記載もあります。これに畑の収穫物をお供えしたようので、この観念は稲作が定着する以前の麦・稗・粟・芋・

豆の文化とも考えられており、これらの作物とともにキュウリ、ナス、ミョウガをお供えし、キュウリを馬、ナスを牛に見立ててお供えしたと考えられています。この風習が後にお盆のお供え物につながったとの考えもあります。現代では、このキュウリの馬とナスの牛は、「祖先の霊が来るときは馬に乗り早く戻り、帰りは名残惜しくゆつくと牛に乗って」と言われていますが、元々は馬も牛も各家で大切に育てられた家族も同然の生き物であることからこの野菜の馬と牛は、亡くなった家畜の代わり(形代)だったという説もあります。もう一つ調べていて面白いことが分かりました。本市周辺に多くお祀りされている星宮・星の宮・星ノ宮神社は、東北から九州まで分布していますが、実は日本中で一番多く祀られているのは当地域なのです。祭神とその謂れはそれぞれ異なりますが、県内では妙見菩薩・虚空蔵菩薩や石裂根裂神が多く日光修験と深い関わりがあるとも言われています。また、藤原一族との関係についても縁起の中に記されており、空想の域を出ません。古麻呂と藤原氏の関係なども想像するとおもしろいと思います。

また、大阪府池田市に所在する星の宮神社(伊居太神社・明星大神宮)の社伝には、古代中国から渡来してきた2人の織姫と星に関する伝説が残



下野市教育委員会 文化財課

されています。ここでは省略したものを紹介します。

「仁徳天皇の時代、まだ、わが国の織物技術が十分でなかった頃、中国から漢織・呉織という名前の2人の姫が池田に渡ってきました。2人の姫は夜遅くまで明かりも付けず、一生懸命に機織りをしていくと多くの星が天から降りてきて、織殿を真昼のように明るく照らしてくれました。星のおかげで綺麗な絹の綾錦を織ることができたので星をお祀りしました。」

また、伊居太神社には漢織姫が、呉織姫は呉服神社に祀られており、池田市には「染殿井」と呼ばれる2人の姫が織物の糸を染めたという伝説の井戸も残されています。

織物を呉服と呼んだことにもつながりますが、渡来人と機織り(姫)、星の宮神社などがつながる、興味深い事例です。

参考・池田市観光協会HP「織姫伝承コース」

お詫び

6月号の記事の中で、「インディアン」という表記をしましたが、違う表記にすべきとのご指摘をいただきました。お詫び申しあげます。